

## 『源氏物語』における二字漢語動詞の特徴

——漢語受容における漢語の和語化について——

柚木 靖史

## 要 旨

## はじめに

本稿は、『源氏物語』の二字漢語動詞を対象に、その語種と使用数を確認し、それぞれの語について、中国文献での意味と『源氏物語』での意味を比べた。その結果、『源氏物語』の二字漢語動詞には、「中国文献（漢籍・仏典）での意味とほぼ一致する漢語」「中国文献に比べて『源氏物語』の漢語の意味が限定的である漢語」「中国文献と『源氏物語』とで、意味が異なる漢語」が認められ、もつとも多いのは、「中国文献に比べて『源氏物語』の漢語の意味が限定的である漢語」であり、この意味の限定化が漢語受容の大きな特徴の一つであることを指摘した。

キーワード…二字漢語動詞、漢語受容、漢語の和語化

『源氏物語』を代表とするような、平安時代の和文は、表記的には仮名を中心とし、それに漢字を交える文章であり、語彙的には和語を中心としながらも、多くの漢語を取り入れている。その漢語の取り入れ方については、漢詩の引用文等の中で、中国の用法をそのまま反映した語もあれば、和語化して文章中に取り入れられた語もある。さらには、日本で作られたと思われる漢語もある。また、漢籍から取り入れた語もあれば、仏典から取り入れた語もある。本稿は、『源氏物語』におけるこのような漢語のさまざまな状況を、漢字二字以上の語より成る漢語動詞について概観することを目的とする。なお、漢字一字から成る漢語動詞については、個々の語について別に論じてきたところである。

さて、本稿で考えたいことの中心は、『源氏物語』で使われた二字以上から成る漢語動詞について、まず、『源氏物語』での意味を確認し、それらの漢語が古代の中国に存するかどうかを確認する。存在の有無を確認したうえで、古代中国文献での意味を調べ、『源氏物語』での意味と比較する。このような作業をとおして、最終的に、『源氏物語』の二字以上から成る漢語動詞を、それぞれ特徴ごとに類型化し、『源氏物語』の漢語動詞の表現価値等、その特徴の一端を示したい。

なお、漢字三字以上の語幹から成る漢語動詞についても考察の対象に入れているが、該当する語は「正三位す」一語だけである。

一 『源氏物語』における使用状況

一―一 使用語と使用数

まず、『源氏物語』にどのような二字漢語動詞が使われているかを、その用例数と共に示したのが表一である。表に示すように二字漢語動詞は三十一語認められ、そのうち「御覧す」の用例数が他の動詞に比して圧倒的に多い。これに対して、用例数が五例以下の漢語動詞は、三十一語中二十語あり、『源氏物語』に使用される二字漢語動詞の三分の二の語数に当たる。

表二は漢字一字以上から成る漢語動詞の使用数を示した表で

表一 『源氏物語』の二字漢語動詞

御覧	懸想	案内	舞踏	見証	変化	徘徊	処分
262	12	9	4	2	2	1	1
対面	卑下	追従	加階	参座	唱歌	勘当	喧噪
74	12	6	3	2	2	1	1
用意	化粧	殿上	経営	修理	行道	逍遙	正三位
14	11	6	3	2	1	1	1
供養	消息	装束	懈怠	出家	勘事	施入	
14	11	5	3	2	1	1	1

表二 『源氏物語』の一字漢語動詞

念	調	孝	要	用
67	15	3	1	1
奏	制	辞	勘	論
60	12	3	1	1
誦	請	拝	感	和
48	8	3	1	1
具	信	秘	死	
36	7	3	1	
怨	臆	弄	動	
34	6	3	1	
屈	興	先	難	
25	4	2	1	
領	困	練	梢	
24	4	2	1	
啓	講	按	服	
15	3	1	1	

ある。語の種類としては三十五語で、二字漢語動詞の種類数と大差はない。「御覧す」のように他を抜きん出て使用数の多い語は見られず、「念す」「奏す」「誦す」「具す」「怨す」が三十例以上で、使用数の多い漢語動詞である。使用数が五例以下の漢語動詞は二十二語で、全体の三分の二程度で、漢字二字漢語動詞と割合は変わらない。二字漢語動詞も一字漢語動詞も、それぞれ

れ十語ほどの漢語動詞が『源氏物語』において比較的多く使われるという特徴がある。

これらの漢語は、王朝の生活を題材にした物語において、その生活を書き表すために必須の漢語動詞なのであろう。例えば、「奏」「啓」については、公式令に則って使われる語であり、天皇や皇太子に言上する場面が多いために、使用数が多いと考えられる。「念」は、最も多い語であるが、神仏へ祈る場面が多く、「祈る」という意味だけではなく「耐える」という意味まで派生している。「誦」については、王朝貴族にとって、和歌や漢詩をそらんじることの重要性を示している。

## 一―二 漢語動詞の意味

ここではまず、表一に挙げた個々の二字漢語動詞について、『源氏物語』の意味について、用例を挙げながら確認しておく。<sup>2)</sup>

### (1) 御覧ず

意味…「見る」の尊敬語（天皇・皇后が主な主体となる）

・皇子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど（桐壺① 24頁）

3行目）

### (2) 対面す

意味…面と向かって会う。

・なほ久しう対面せぬ時は心細くおぼゆるを（夕顔① 139頁 6行目）

### (3) 用意す

意味…気を配る。気を遣う。

・男は、いと尽きせぬ御さまを、うち忍び用意したまへる御けはひいみじうなまめきて（末摘花① 282頁4行目）

### (4) 供養す

意味…三宝に対して施しを行う。経仏供養を行う。

・「これは童べの供養<sup>を</sup>てはべる初穂なり」とて奉れり。（早蕨⑤ 346頁5行目）

### (5) 懸想す

意味…異性に思いを懸ける。

・昔は、懸想する人のありさまのいづれとなきに思ひわづらひてだにこそ（浮舟⑥ 184頁13行目）

### (6) 卑下す

意味…へりくだる。謙遜する。

・また、いたく卑下せずなどして（薄雲② 441頁10行目）

## (7) 化粧す

意味…化粧をする。

- ・我も我もと装束さうぞくき化粧けしょうじたるを見るにつけて (葵② 68頁 3行目)

## (8) 消息す

意味…手紙を介して要件を相手に伝える。(手紙を自ら持参する場合もある。)

- ・「さらば、その心やすからん所に消息せうぞくしたまへ。みづからやは、かしこに出でたまはぬ。」(東屋⑥ 86頁9行目)

## (9) 案内す

意味…面会して事情や意向を問いたす。挨拶を取り次ぐ。

- ・放ちたまはせてむやと、ほとりにつきて案内やんないし申さするを (蓬生② 328頁3行目)

## (10) 追従す

意味…機嫌を取る。こびへつらう。

- ・童わらはなれば、宿直人とのみびとなどにもに見入れ追従ついしやうせず心やすし (空蟬① 119頁2行目)

## (11) 殿上す

意味…殿上の間や紫宸殿に昇る。童殿上をする。<sup>3</sup>

- ・内裏うち、春宮とうぐうの殿上てんじやうしたまふ。(滯標② 284頁4行目)

## (12) 装束す

意味…装束を整える。

- ・なほ装束さうぞくしたまひて (真木柱③ 364頁13行目)

## (13) 舞蹈す

意味…朝廷などでの朝賀・即位・節会・叙位・任官などの際の拝礼の作法を行う。<sup>4</sup>

- ・太政大臣降りて舞蹈ぶたふしたまふ (藤裏葉③ 460頁14行目)

## (14) 加階す

意味…位を賜り昇進する。<sup>5</sup>

- ・みなおのおの加階かかいしのぼりつつ (少女③ 23頁6行目)

## (15) 経営す

意味…世話や接待をしたり準備をし、忙しく立ち働く。<sup>6</sup>

- ・大殿も経営けいぎやうしたまひて (夕顔① 183頁2行目)

## (16) 懈怠す

意味…なまける。怠る。

・行ひも懈怠して（柏木④ 304頁7行目）

## (17) 見証す

意味…碁・蹴鞠などの勝負を判定する。

・かの御碁の見証せし夕暮のことも言ひ出でて（竹河⑤ 84頁12行目）

## (18) 参座す

意味…新年の参賀をする。<sup>7</sup>

・参座しにとても、あまた所も歩きたまはず、内裏、春宮、一院ばかり、さては藤壺の三条宮にぞ参りたまへる。（紅葉賀① 324頁7行目）

## (19) 修理す

意味…破損部分をつくりなおす。

・なほ、かの六条の古宮をいよく修理しつくりひたりければ（濡標② 309頁11行目）

## (20) 出家す

意味…俗世間の生活から離れて、僧侶を志して仏道修行に専

念する。

・まことに出家せしめたてまつりてしにはべり。（夢浮橋⑥ 377頁11行目）

## (21) 変化す

意味…動物などが別のものに姿を変える。

・狐の变化したる。（手習⑥ 281頁13行目）

## (22) 唱歌す

意味…笛・琴・琵琶などの旋律を、譜によつて歌う。

・唱歌したまへる声いとおもしろければ、（③ 37頁4行目）

## (23) 行道す

意味…仏を供養するために、僧尼が列を作り、経を唱えながら仏像や仏堂の周囲を右回りに回る。<sup>8</sup>

・月夜に出でて行道するものは、（明石② 271頁8行目）

## (24) 勘事す

意味…とがめる。

・「しばし勘事したまふべきにやあらむ」（真木柱③ 359頁14行目）

## (25) 徘徊す

意味…同じところを行ったり来たりする。

・松門に暁到りて月徘徊すと、(手習⑥ 349頁1行目)

## (26) 勘当す

意味…嚴重に処罰する。

・重く勘当せしめたまふべきよしなん仰せ言はべりつれば、

(浮舟⑥ 183頁14行目)

## (27) 逍遙す

意味…気の向くままに、あちこち遊覧する。

・浦づたひに逍遙しつつ来るに、(須磨② 203頁13行目)

## (28) 施入す

意味…布施の物を贈る。

・仏に罷申ししたまひてなむ、御堂に施入したまひし。(若菜

上④ 117頁4行目)

## (29) 処分す

意味…生前に遺産を分配する。

・ほどにつけてみな処分したまひて(若菜上④ 117頁6行目)

## (30) 交雑す

意味…しかりとばす。<sup>10</sup>

・「けうさうし」まどはかされなん」とのたまひて、(少女③ 25頁12行目)

## (31) 正三位す

意味…正三位に昇進する。<sup>11</sup>

・その夜、源氏の中將正三位したまふ。(紅葉賀① 315頁13行目)

## 二 中国文献における二字漢語

## 二— 出現状況と意味

本節では、『源氏物語』の漢字二字以上の語幹から成る漢語動詞について、中国文献の使用状況を確認する。中国文献としては、『源氏物語』成立時よりも前に、日本にもたらされ、日本の文献に影響を与えた『史記』『漢書』『文選』を対象とする。また、仏典は、『妙法蓮華経』<sup>13</sup>から用例を検索した。

## (1) 御覧

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華経』のいずれの文献にも使

用例が認められない。ただし、『大漢和辞典』には、「御覧」の使用例として「天子がみそなわすこと」という意味で、『北史』の例を載せる。『大正新修大藏經』にも「御覧」の使用例が認められる。<sup>14</sup>

### (2) 対面

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。ただし、『大漢和辞典』<sup>15</sup>には、「対面」の使用例として「顔をあわせる」という意味で、『顔氏家訓』の例を載せる。『大正新修大藏經』にも「対面」の使用例が認められる。

### (3) 用意

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。ただし、『大漢和辞典』には、「用意」の使用例として「意を用する」「心を使う」という意味で、『老子』の例を載せる。『大正新修大藏經』にも「用意」の使用例が認められる。

### (4) 供養

漢書の「供養」には、「供え進める」という意味と、「孝養する」という意味が認められる。①の「供養」は「食を供え進める」という意味である。②の「供養」は「孝養する」という意味である。③の例は「仏に供物を真心から捧げる」という意味である。『源氏物語』で使われた「供養」は、③の例のような、仏典の「供養」にもとづいていると考えられる。

① 今乃幸以天年得復供養于高廟、朕之不明與嘉之、(漢書 文帝紀第四 和刻本一 60頁上右5行目)<sup>16</sup>

② 民年九十以上、已有受鬻法、為復子若孫、令得身帥妻妾遂其供養之事。(漢書 卷六 武帝紀第六 和刻一 65頁上左8行目)

③ 皆得陀羅尼。衆説弁才。転不退転法輪。供養無量。百千諸仏。(妙法蓮華經 序品第一)

### (5) 懸想

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。ただし、『大漢和辞典』には、「懸想」の使用例として「とほくおもひやる。空しく思ふ。」という意味で、「庾信」作の詩の例を載せる。この説明によれば、漢語動詞

の「懸想」は、中国文献から受容した可能性も存するが、『源氏物語』の「懸想す」は「恋愛感情を抱く」という意味であり、中国文献の「とほくおもひやる。空しく思ふ。」という意味とは異なる。『大正新修大藏經』には、「首楞嚴義疏注經」に一例、「懸想」の使用例が認められる。

#### (6) 卑下

①の「卑下」は「へりくだる」という意味である。②の「卑下」は「土地が低い」という意味である。①の意味は人事であり、②は事物の状態である。『妙法蓮華經』には用例は確認できない。ただし、『大正新修大藏經』によれば、『妙法蓮華經』以外の仏典には使用されている。

- ① 魏相國建城侯彭越勤勞魏民、卑下士卒、常以少擊衆、數破楚軍（漢書 高帝紀第一下 和刻本一 40頁下右8行目）

- ② 陂障卑下、以為汙澤（漢書 溝洫志第九 和刻本一 418頁上右10行目）

#### (7) 化粧

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使

用例が認められない。『大漢和辞典』では、「紅・白粉などをつけて顔をよそほひ飾ること。おつくり。みじまひ。」「うつくしく飾ること。色どること。外観を装ひ飾ること。」という意味が載せられているが、用例は挙げていない。恐らく、中国には用例が認められないことであろう。『大正新修大藏經』にも「化粧」の使用例は認められない。

#### (8) 消息

①の「消息」は、「万物の盛衰」の意味である。『新釈漢文大系』<sup>19</sup>の注に「消」は滅亡、消滅、「息」は生長、増長の意。」とある。②の「消息」は「葉の表と裏」という意味であるが、これも、「表と裏」すなわち「盛と衰」と解してよいであろう。『妙法蓮華經』には、「消息」の例は確認できない。ただ、『大正新修大藏經』によれば、他の仏典には使用例が認められる。

- ① 陰陽為炭、萬物為銅、合散消息、安有常則。千變萬化、未始有極。（漢書 賈誼伝第十八 和刻本二 548頁下右7行目）

- ② 芳芬鬱、亂於五風。從容猗靡、消息陽陰。（文選 文章篇上 七発八首 120頁9行目<sup>17</sup>）



## (9) 案内

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。ただ、『大正新修大藏經』には「案内」の使用例が認められる。

## (10) 追従

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大漢和辞典』では、「後につきしたがってゆく」という意味として、明代の文徵明の文章を載せる。ただ、『大正新修大藏經』には、使用例が認められる。

## (11) 殿上

①の「殿上」は「御殿の上」という意味である。この「殿上」が、「御殿の中の上部」なのか、「御殿の外の上空」なのかは、定かではない。②の「殿上」は、「御殿の中の上部」の意味である。『文選』『妙法蓮華經』には「殿上」の使用例が確認できない。これらの「殿上」はいずれも名詞としての意味で、『源氏物語』のように「殿に上がる」という意味の使用例は確認できない。なお、『大正新修大藏經』にも「殿上」は認められるが、す

べて「勝殿上」「正法殿上」「高殿上」のように「殿」は「勝殿」などの「漢語の形態素（接尾辞）」の用法であって、「殿上」の使用例とは認めがたい。

① 幸中都宮、殿上見光。（漢書 武帝紀第六 和刻本一 73 頁下右8行目）

② 殿上群臣皆呼萬歲、大笑為樂。（史記 高祖本紀八 史記二 本紀 573頁7行目<sup>18</sup>）

## (12) 装束

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大漢和辞典』には、「身じたくする」という意味で古詩の例を載せ、「礼服を着る。又、美しい衣服を着る。盛装する。」という意味で李伯の詩を載せる。また、「旅行の支度をする。旅行の用意をする。」という意味として、『蜀志』の例を載せる。ただ、『大正新修大藏經』には「装束」の使用例が認められる。

## (13) 舞踏

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大漢和辞典』によれば、「足踏みして飲

びをどる」という意味で『礼記』に使用例が見られ、「朝拜のとき、手をまはし足をふみならず礼儀」という意味で『宋史』に使用例が見られる。ただ、『大正新修大藏經』には「舞踏」の使用例が認められる。

#### (14) 加階

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大漢和辞典』では、「位階をのぼせる」という意味として、『北史』の例を載せる。『大正新修大藏經』には「加階」の使用例として日本の仏教書の例のみを挙げていることから、「加階」は中国の仏典では使用されなかったようである。

#### (15) 経営

①の「経営」は「きりもりしながら物事を治める」という意味である。②③④⑤の「経営」は、「往き来する・めぐる」という意味である。②は人が「行ったり来たり」することを表す。③は川の流れが行ったり来たりして、くねくねと曲がっていることを表す。④は虻が行ったり来たりして飛び交う様子である。⑤は自然の風物が行き来するように変化することを表す。この

ように、「往き来する・めぐる」という意味の「経営」は、人の行動を表わさないことがある。『妙法蓮華經』には、「経営」の使用例が確認できない。ただ、『大正新修大藏經』には「経営」の使用例が認められる。

- ① 経営萬億、咸遂厥宇。(漢書 礼楽志第二 和刻本一 63頁下右9行目)

- ② 經營炎火而浮弱水兮、杭絕浮渚而涉流沙。(史記 列伝五 司馬相如列伝第五十七 346頁5行目)

- ③ 鄭鄙潦滴、紆餘委蛇、經營乎其内。(史記 列伝五 司馬相如列伝第五十七 272頁2行目)

- ④ 夫蚊虻終日經營、不能越階序。(文選 文章篇下 四子講徳論 154頁6行目)

- ⑤ 夫所以經營其左右者、固以自然神麗、而足思愛樂矣。(文選 賦篇下琴賦 308頁4行目)

#### (16) 懈怠

①の「懈怠」は「疲れる」という意味である。②の「懈怠」は「怠ける」という意味である。ここに挙げた「怠ける」という意味の「懈怠」は仏典の例であるが、『大漢和辞典』には、「おこたる。なまける。又、おこたり。怠惰。怠懈。」の意味で、『韓非子』の例を載せる。

- ① 於是乎游戲懈怠、置酒乎昊天臺、張樂乎驂輶之宇。  
 (史記 司馬相如列傳第五十七 史記十二 296頁1行目)
- ② 時有一弟子 心常懷懈怠、貪著於名利 (妙法蓮華經 序品第二)

## (17) 見証

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大漢和辞典』によれば、「あきらかなしるし、証拠」という意味で、『淮南子』に使用例が確認できる。『大正新修大藏經』には「見証」の使用例が認められる。

## (18) 参座

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大漢和辞典』には、「其の席に列すること」という意味で、周弘正の詩を載せる。『大正新修大藏經』には「参座」の使用例が日本の仏教書に認められる。

## (19) 修理

①の「修理」は、「修まる」という意味である。②の「修理」

は、「繕い直す」という意味である。『妙法蓮華經』には、使用例が確認できない。ただ、『大正新修大藏經』には「修理」の使用例が認められるので、仏典にも使用された語である。

- ① 是時、黜陟有序、眾職修理、公卿多稱其位、海内興於禮讓。(漢書 魏相丙吉傳第四十四 和刻本二 775頁 右8行目)

- ② 伏見詔書并鄭義泰宣敕、當賜修理臣亡高祖、晉故驃騎大將軍、建興忠貞公壺墳塋。(文選 文章篇 中 71頁 2行目 為卞彬謝修卞忠貞墓啓)

## (20) 出家

①の「出家」は、「家を出て仏の道に入る」という意味である。「出家」の使用例は仏典には確認できるが、漢籍の『史記』『漢書』『文選』には確認できない。

- ① 其最後仏。未出家時。有八王子。(妙法蓮華經 序品第

二)

## (21) 変化

①②の「変化」の意味は、「形が変わる」「形を変わらせる」という意味である。③の『妙法蓮華經』の「変化」は、「仏が姿

を変えること」という意味である。

- ① 日中則移、月滿則虧。物盛則衰、天地之常數也。進退盈縮、與時變化、聖人之常道也。(史記 范雎蔡澤列伝 第十九 史記九 207頁7行目)

- ② 形氣轉續兮、變化而蟺。(文選 鵬鳥賦 賦篇下 104 頁1行目)

- ③ 是妙音菩薩。如是種種。變化現身。在此娑婆国土。為諸衆生。說是經典。於神通變化智慧。(妙法蓮華經 妙音菩薩品 第二十四)

## (22) 唱歌

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大漢和辞典』には、「うたをうたふ」という意味として、白居易の詩の例を載せる。『大正新修大藏經』には「唱歌」の使用例が認められる。

## (23) 行道

①の「行道」は、「道を行くこと」という意味である。②の「行道」は、「道徳の道を行う」という意味である。③の「行道」は、「仏道を求め行う」という意味である。

- ① 高祖擊布時、為流矢所中、行道病。(史記 高祖本紀第八 史記二 581頁1行目)

- ② 八年、申不害相韓、修術行道、國內以治、(史記 韓世家第八 史記六 725頁3行目)

- ③ 十方大菩薩 愍衆故行道 応生恭敬心 (妙法蓮華經 如來壽量品 第十六)

## (24) 勘事

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大正新修大藏經』には「勘事」の使用例が日本の仏教書だけに認められることから、中国の仏典では「勘事」は使用されなかったと考えられる。

## (25) 徘徊

①の「徘徊」は、「さまよい歩く」という意味である。②の「徘徊」は、「ためらう」という意味である。『妙法蓮華經』には「徘徊」の例は確認できない。ただ、『大正新修大藏經』によると、他の仏典には「徘徊」の使用例が認められる。

- ① 徘徊將何見 憂思獨傷心。(文選 詩篇上 200頁4行目)

⑤ 清商隨風發、中曲正徘徊。(文選 古詩十九首 詩篇下  
559頁5行目)

(26) 勘当

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大漢和辞典』には、「罪をかんがへて法にあてる、罪科を調査する」という意味として、『唐書』の例を載せる。『大正新修大藏經』には「勘当」の使用例が認められる。

(27) 逍遙

①の「逍遙」は、「氣の向くままにさまよい歩き遊ぶ」という意味である。②の「逍遙」は、「氣の向くままにたのしむ」という意味である。『妙法蓮華經』には「逍遙」の使用例は確認できないが、『大正新修大藏經』には「逍遙」の使用例が認められる。

① 明歳、子路死於衛。孔子病、子貢請見、孔子方負杖逍遙於門。(孔子世家第十七 史記 世家下 881頁2行目)

② 私願偕黃髮、逍遙綜琴書。舉爵茂陰下、攜手共躊躇。

(文選 詩篇上 贈答二 288頁5行目)<sup>20</sup>

(28) 施入

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大漢和辞典』にも「施入」は載せられていない。『大正新修大藏經』には「施入」の使用例が認められるので、仏典には使用された語である。①の「施入」は、「諸仏に財宝、衣食を施し物として贈る」という意味である。

① 我所奉事諸佛多 財寶衣食常施入(佛說普曜經)

(29) 処分

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大漢和辞典』によれば、「処分」の使用例が古詩に認められる。『大正新修大藏經』には「処分」の使用例が認められる。

(30) 交雑

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大漢和辞典』には「入り混じる、錯雑する、入り組む」という意味で記載されるが、用例は示されていない。したがって、漢籍に「交雑」が使われたかどうかについ

ては、今のところ未確認である。『大正新修大藏經』には「交雑」の使用例が認められるので、仏典には使用された語である。

①の「交雑」の意味は、「入り混じる」である。なお、「けうそう」と仮名表記される語が、どのような語に由来するかということについては、定かではない。「喧噪」という説もあるが、「喧噪」も『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大漢和辞典』には、「喧譟」として掲載され、『隋書』の用例を載せる。『大正新修大藏經』には「喧噪」の使用例が認められ、「喧噪」の使用例は認められない。なお、『大正新修大藏經』での使用数は、「喧噪」より「交雑」の使用例のほうが多い。

① 此堂往來交雑、遂乃亂衆人或去來法事（佛本行集經）

(31) 正三位

『史記』『漢書』『文選』『妙法蓮華經』のいずれの文献にも使用例が認められない。『大正新修大藏經』には「正三位」の使用例が日本で書かれた仏教書のみ認められることから、中国の仏典では「正三位」は使用されなかったと考えられる。「正三位」は、日本で作られた職位であろう。

## 二―二 中国文献の使用例との比較

### 二―二―一 中国文献に使用例が認められない二字漢語動詞

ここで、中国文献の二字漢語動詞と『源氏物語』の二字漢語動詞の使用状況を整理する。まず、中国文献（漢籍・仏典）に使用例が認められない漢語動詞には、「化粧」「勘事」「正三位」がある。これらの漢語動詞は、日本で作られた漢語、すなわち和製漢語である可能性が高い。

### 二―二―二 中国文献に使用例が認められる二字漢語動詞

(1) 漢籍にも仏典にも使用例が認められる漢語動詞

漢籍にも仏典にも使用例が認められる漢語動詞には、「御覧」「対面」「用意」「供養」「懸想」「消息」「卑下」「殿上」「装束」「舞踏」「経営」「懈怠」「見性」「修理」「変化」「唱歌」「行道」「徘徊」「勘当」「逍遙」がある。

### (2) 仏典にのみ使用例が認められる漢語動詞

漢籍には使用例が認められず、仏典に使用例が認められる漢語動詞としては、「案内」「追従」「出家」「施入」「交雑」がある。

## (3) 漢籍にのみ使用例が認められる漢語動詞

仏典には使用例が認められず、漢籍に使用例が認められる漢語動詞としては、「舞踏」「参座」「加階」がある。

以上、分類したように、中国文献で使用例が認められる二字漢語動詞は、多くが漢籍にも仏典にも使用例が認められる。仏典のみに使用例が認められる漢語動詞のうち、「出家」「施入」については、仏教の教義と関わる語であり、仏教語と言えよう。

『源氏物語』の「出家」「施入」も、仏典から日本の文章表現の中に取り入れられたのであろう。仏典には用いられず漢籍に用いられる漢語動詞の「舞踏」「参座」「加階」は、宮廷での官人の所作や宮廷制度と関わりのある語である。このように見ると、『源氏物語』で使用された二字漢語動詞は、仏典出自の語と、漢籍出自の語があることがわかる。ただし、中国文献に使用例が認められても、意味が全く異なれば、ただ、文字列が同じである可能性も考えられることになり、『源氏物語』の二字漢語動詞が中国文献を出自としているとは言えない場合が生じてくる。

そこで、次項では、中国文献に使用例が認められる二字漢語動詞について、意味の観点から、中国文献と『源氏物語』の二字漢語動詞を比べておきたい。

## 二―二―三 中国文献と『源氏物語』における二字漢語動詞の意味比較

## (1) 御覧

中国文献の「御覧」の意味は「貴人が見そなはす」で、『源氏物語』の「御覧」の意味は「高貴な身分の人物が見そなはす」という意味であるから、漢籍の「御覧」と『源氏物語』の「御覧」には、意味に共通点が存する。

## (2) 対面

漢籍、仏典ともに使用例が確認できる。中国文献の「対面」の意味は「顔を合わせる」で、『源氏物語』の「対面」も「顔を合わせる」であるから、漢籍の「対面」と『源氏物語』の「対面」には、意味に共通点が存する。

## (3) 用意

漢籍、仏典ともに使用例が確認できる。中国文献の「用意」の意味は「意を用する」「心を使う」で、『源氏物語』の「用意」も「意を用する」「心を使う」であるから、中国文献の「用意」



と『源氏物語』の「用意」には、意味に共通点が存する。

(4) 供養

漢籍、仏典ともに使用例が確認できる。『源氏物語』の「供養」の意味は、「三宝に対して施しを行う」という意味であるのに対して、漢籍の「供養」には「供え進める」と「孝養する」という意味があり、仏典には「仏に供物を捧げる」という意味がある。このことから、『源氏物語』の「供養」は、漢籍ではなく、仏典の「供養」の意味と共通点が認められる。

(5) 懸想

漢籍、仏典ともに使用例が確認できる。中国文献の「懸想」の意味は「遠くおもひやる。空しく思ふ」で、『源氏物語』の「懸想」は「異性に思いを懸ける」であるから、両者の意味には共通点が認められるものの、『源氏物語』の「懸想」は「異性」に限定された思いであるという点で違いが認められる。

(6) 卑下

漢籍、仏典ともに使用例が確認できる。これら中国文献の

「卑下」には、「へりくだる」という意味と「土地が低い」という意味とがあることが確認できる。『源氏物語』の「卑下」は、「へりくだる」の意味と共通点が認められる。

(7) 化粧

漢籍、仏典ともに使用例が確認できない。

(8) 消息

漢籍、仏典ともに使用例が確認できる。中国文献の「消息」の意味は、「移り変わり」「盛衰」「音信」という意味が存する。『源氏物語』の「消息」は「手紙を介して要件を相手に伝える」の意味である。中国文献の「消息」の意味の中で、「音信」という意味だけ、共通点が認められる。

(9) 案内

漢籍に「案内」の使用例は確認できないが、仏典に使用例が確認できる。仏典の「案内」は、「詳細や事情」という意味で、動詞として使われた例は今のところ確認できない。『源氏物語』の「案内」の意味は、「事情や意向を問いたす」なので、仏典



の「案内」の意味と共通点が認められる。

(10) 追従

仏典には使用例が確認できるが、漢籍には明代の例しか確認できない。意味は、「付き従う」という意味である。『源氏物語』の「追従」は、「機嫌を取る」という意味であるから、仏典の「追従」と『源氏物語』とは、意味に相違点が認められる。

(11) 殿上

漢籍、仏典に「殿上」の語は見られるが、「御殿の上」という意味である。「殿に上がる」「殿内に入る」という意味は中国文献には確認できない。

(12) 装束

漢籍にも仏典にも使用例が確認できる。意味は、「身じたくする」「礼服を着る」「旅行の支度をする」である。『源氏物語』の「装束」の意味は、「衣服を整えて身支度をする」であるから、中国文献の「身支度する」「礼服を着る」という意味と共通点がある。ただし、「旅行の支度をする」という意味は、『源氏物語』

の「装束」には見られない。

(13) 舞踏

漢籍、仏典ともに使用例が確認できる。意味は、「足踏みして遊びおどる」「朝拝のとき、手をまはし足をふみならず礼儀」である。『源氏物語』の「舞踏」の意味も「朝廷などでの朝賀・即位・節会・叙位・任官などの際の拝礼の作法を行う」であり、中国文献の「朝拝のとき、手をまはし足をふみならず礼儀」の意味との共通点が見られる。ただし、『源氏物語』の「舞踏」には、「足踏みして遊びおどる」という意味は存しない。

(14) 加階

漢籍には使用例が見られるが仏典には見られない。意味は、「位階をのぼらせる」である。『源氏物語』の「加階」は、「位を賜り昇進する」という意味であるから、漢籍の「加階」の意味と共通点が確認できる。

(15) 経営

漢籍、仏典ともに使用例が確認できる。意味は、「きりもりす

る」「往き来する・めぐる」である。『源氏物語』の「経営」は、「世話・接待をしたり準備をしたりして、忙しく立ち働く」であるから、中国文献の「経営」の意味である「きりもりする」と共通点が見られる。ただし、「きりもりする」でも、中国文献の「経営」は国家の政治が対象であるのに対して、日本の「経営」は、日常生活が対象である。

#### (16) 懈怠

漢籍、仏典ともに使用例が確認できる。中国文献の「懈怠」の意味は、「疲れる」「怠ける」という意味である。これに対して、『源氏物語』の「懈怠」の意味は、「怠ける」であるから、中国文献の「懈怠」の意味のうち、「怠ける」と共通点が見られる。「疲れる」の意味は、『源氏物語』の「懈怠」の意味には確認できない。

#### (17) 見証

漢籍、仏典に使用例が見られる。意味は、「あきらかなしるし、証拠」である。これに対して、『源氏物語』の「見証」は、「碁・蹴鞠などの勝負を判定する」である。中国文献の「見証」と『源氏物語』の「見証」の意味は、「あきらかなしるし、証

拠」という意味は共通しているが、『源氏物語』の「見証」は、「碁・蹴鞠などの勝負」に限定しているという点で、意味に違いが存する。

#### (18) 参座

漢籍に使用例が見られるが、仏典には見られない。意味は「其の席に列すること」である。『源氏物語』の「参座」の意味は「新年の参賀をする」であるから、「席に列すること」という点では両者の意味に共通点が存するが、『源氏物語』の「参座」は「新年の参賀」という限定された行事が対象である。

#### (19) 修理

漢籍にも仏典にも使用例が確認できる。意味は「修まる」「繕い直す」である。『源氏物語』の「修理」の意味は「繕い直す」であるから、中国文献の「修理」の意味とに共通点が存する。ただし、『源氏物語』の「修理」には、中国文献に見られるような「修まる」という意味は確認できない。

## (20) 出家

仏典に使用例が確認できるが、漢籍には確認できない。意味は、「家を出て仏道修行をする」である。『源氏物語』の「出家」の意味も、「俗世間の生活から離れて、僧侶を志して仏道修行に専念する」という意味であるから、仏典の「出家」の意味と共通点が認められる。おそらく、『源氏物語』の「出家」は、仏典の「出家」を受容したのであろう。

## (21) 変化

漢籍、仏典ともに使用例を確認できる。ただし、仏典の「変化」の意味は「神仏がすがたを変える」という意味で、これに対して漢籍の「変化」の意味は、「形が変わる」「形を変えさせる」である。『源氏物語』の「変化」は、「神仏がすがたを変える」という意味なので、仏典の「変化」を受容したと考えられる。

## (22) 唱歌

漢籍、仏典ともに使用例が確認できる。意味は、「うたをうたふ」である。『源氏物語』の「唱歌」の意味は、「旋律を譜に

よって歌う」であり、中国文献の「唱歌」の意味と同じである。

## (23) 行道

漢籍、仏典ともに使用例が確認できる。漢籍の「行道」の意味は、「道を行くこと」「道徳の道を行う」で、仏典の「行道」の意味は、「仏道を求め行う」である。『源氏物語』の「行道」の意味は、「仏を供養するために、僧尼が列を作り、経を唱えながら仏像や仏堂の周囲を回る」で、仏典の「行道」の意味に比べて、限定的な意味を表す。

## (24) 勘事

漢籍、仏典ともに使用例が確認できない。恐らくは、『源氏物語』の「勘事」は、中国文献から受容したのではなく、和製漢語であろう。

## (25) 徘徊

漢籍、仏典ともに使用例が確認できる。『源氏物語』に「さまよい歩く」という意味の「徘徊」の例が見られるが、長恨歌の引用部分での使用である。

## (26) 勘当

漢籍、仏典に使用例が確認できる。意味は、「罪をかんがへて法にあてる、罪科を調査する」である。『源氏物語』の「勘当」の意味は、「嚴重に処罰する」であり、意味に共通点が見られる。

## (27) 逍遙

漢籍、仏典に使用例が確認できる。意味は、「氣の向くままにさまよい歩き遊ぶ」「氣の向くままにたのしむ」である。『源氏物語』の「逍遙」の意味は、「氣の向くままにさまよい歩く」で、中国文献の「逍遙」の意味のうち、「氣の向くままにさまよい歩き遊ぶ」の方と同じである。『源氏物語』の「逍遙」の意味は、中国文献の「逍遙」に比べて、限定的である。

## (28) 施入

漢籍には使用例は認められないが、仏典には認められる。仏典の「施入」の意味は、「施し物を贈る」という意味である。これに対して、『源氏物語』の「施入」の意味は、「布施の物を贈る」であるから、中国仏典の「施入」の意味と『源氏物語』の

「施入」の意味とは同じであると考えられる。このような状況から、『源氏物語』の「施入」は、仏典から受容されたと考えられる。

## (29) 処分

漢籍、仏典ともに使用例が認められる。意味は、「取り計らう。処置する」である。『源氏物語』の「処分」の意味は、「生前に遺産を分配する」であるから、中国文献の「処分」の意味に対して、『源氏物語』では、「財産の分配」に関する「とりはからい」「処置」という意味なので、『源氏物語』の「処分」のほうが、限定的である。

## (30) 交雑

『源氏物語』の「けうそう」については、その語源が特定されていない。仮に「交雑」であるとすれば、漢籍には使用例が確認できず、仏典に使用例が確認できる。意味は、「入り混じる」である。

## (31) 正三位

漢籍、仏典ともに使用例が認められない。日本独自の職位であると考えられる。

## 結 論

以上、『源氏物語』の二字からなる漢語動詞について、中国文献（漢籍・仏典）での使用状況を見てきた。

『源氏物語』の二字からなる漢語動詞には、①「漢籍にも仏典にも使用される漢語動詞」②「漢籍には用いられず仏典に用いられる漢語動詞」③「仏典には用いられず漢籍に用いられる漢語動詞」④「漢籍にも仏典にも使用されない漢語動詞」が存在する。このうち①②③は、中国から受容した漢語の可能性がある。これらに対して、④は、和製漢語の可能性がある。中国から受容した漢語の可能性のある漢語には、もともと中国において漢籍と仏典で使用状況の差があり、②のような漢籍から受容された漢語と③のような仏典から受容された漢語がある。

『源氏物語』の漢語動詞は、中国文献（漢籍・仏典）から受容された可能性のある漢語が多いのであるが、意味の観点から考えると、中国文献に使用される漢語を、そのまま『源氏物語』のような平安時代和文で使用したのではないことが分かる。以

下、中国文献で使用された漢語と日本文献で使用された漢語について、両者を意味の観点から比較して整理する。

- (1) 中国文献（漢籍・仏典）での意味とほぼ一致する漢語  
「御覧」「対面」「案内」「用意」「供養」「出家」「唱歌」  
「徘徊」「勘当」「施入」

- (2) 中国文献に比べて『源氏物語』の漢語の意味が限定的である漢語

- 「懸想」「卑下」「消息」「装束」「舞蹈」「経営」「懈怠」  
「修理」「変化」「行道」「逍遙」「処分」

- (3) 中国文献と『源氏物語』とで、意味が異なる漢語  
「追従」「殿上」「見証」

分類結果から分かることは、(2)「中国文献に比べて『源氏物語』の漢語の意味が限定的である」に属する漢語が最も多い。(3)の「中国文献と『源氏物語』とで、意味が異なる漢語」は、三語と少ない。(3)については、中国文献の意味と異なることから、中国文献の漢語と表記は同じでも、和製漢語の可能性がある。

ここで、注目したいのは、(2)の「中国文献に比べて『源氏物語』の漢語の意味が限定的である」に属する漢語が語数として最も多いということである。これらの語は、中国文献の漢語を

そのまま受容したのではなく、不足している日本語の語彙を補うために、必要に応じて、本来の意味を限定して受容したのであろう。複数の意味を有する漢語としてそのまま受容したのでは、正確に情報を伝える働きが弱くなる。そこで、なるべく一つの語は一つの意味を表すように、意味を限定したのであろう。意味を限定させて受容した漢語には、「懸想」「卑下」「消息」「装束」「舞踏」「経営」「逍遙」など、宮廷での行事や生活に欠かすことのできない漢語が多く含まれている。この点で、これらの漢語は中国文献にすでに認められるとしても、和語化した漢語ということができよう。

このように、『源氏物語』の二字漢語は、その多くは、もともとと中国文献で使用されているのであるが、意味の限定化が認められる。

この意味の限定化は、中国からの漢語受容の、大きな特徴であると考えられる。このことから、平安時代の貴族の生活を題材とする平安時代の和文の表現描写において、漢語の和語化が果たした役割は大きかったと言えるのである。

注

1 「けうそう」が表す漢語については、「交雑」や「喧噪」など、説が定まっていない。

2 『源氏物語』の用例は、『新編日本古典文学全集』（小学館）によった。

3 章殿上、幼少時から殿上で上流貴顕としての作法を見習うこと。  
(2) 284頁頭注

4 清涼殿の東庭に降りて帝に対し謝意をこめた拝舞をする。その作法は、再拝し笏を置いて、立って袖を左右左と振り、笏をとって小拝し、立って再拝する（拾芥抄）。(2) 460頁頭注

5 元服と同時に叙爵して五位となり、その後も叙位で昇進する。(3) 23頁頭注

6 「けいせい」の音転。世話に忙しく奔走する。(1) 160頁頭注

7 年賀の拝礼。(1) 324頁頭注

8 元来、法会するとき僧が列を作って読経しながら、仏や仏殿の周囲を回ること。ここは入道がたまたま庭先で念仏を唱えていたのを、大げさに滑稽化したものであろう。(2) 271頁頭注

9 『源氏物語』のこの用例は、漢籍を訓読した例である。出典は、『白氏文集』（巻四 陵園妾）。(6) 349頁頭注による。

10 「喧噪」の字音という。(3) 25頁頭注

11 中将（近衛府の次官）は従四位相当官。したがって源氏の正三位昇進は異例の叙位。(1) 315頁頭注

12 中央研究院 漢籍電子文献データベースによって検索した。  
大正新脩大藏経テキストデータベースによって検索した。  
13に同じ。

15 『大漢和辞典』（諸橋轍次著 大修館書店）  
『和刻本正史3・4』（汲古書院 一九七三）によった。

16 『新釈漢文大系』（明治書院 一九六三—二〇〇一）によった。  
17 『新釈漢文大系』（明治書院 一九七三—二〇一四）によった。

18 『新釈漢文大系』（明治書院 一九七三—二〇一四）によった。  
19 『新釈漢文大系 史記 九』（列伝二 孟子荀卿列伝第十四 七頁）によった。

20 『新釈漢文大系 文選 詩篇上』（贈答二 289頁注）には、「逍遙」の意味として、「さまよう。ここは、何ものにも、しばられず、本性にしたがって思いのままにする意。」とある。

The Characteristic of the Verb (Japanese Words of Chinese Origin) Written by  
Two Chinese Characters in “Genjimonogatari (源氏物語)”  
——About the Phenomenon Occured by Introducing the  
Chinese as the Japanese Stile——

YUNOKI Yasushi